

---

# 女の園は

津梅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女の園は

### 【Nコード】

N3281Z

### 【作者名】

津梅

### 【あらすじ】

女子高に赴任した「自分」だが、「女の園」と思われていたそこに勤めて数か月で目が慣れ、逆に女に対し、ときめきがなくなってしまう。友人にはそれを「恋の喪失」と言われるが…

女子高に勤めて数か月と経って、当初は女の園と、教師に有るまじき破廉恥ご免の性欲昂ぶった妄想抱きながらその度に自制を働かせていたものだが、園も長く見れば目に馴染んで只の一風景となるもので、休み時間、一角で机上に胡坐をかいて男言葉でわいわいと俗な話に馬鹿笑いをしていれば、別の一角では、上は制服、下はジャージの不統一な格好をしながら手鏡覗き込んで化粧をしているのを目にしたりして、またまた別の一角では栄養ドリンクをストローで吸いながら携帯電話でゲームに没頭するのを見たりすると、どれも男の手前勝手と求める清楚可憐の像とも程遠く、妄りな想いとやらも冷めに冷めて幻滅して、時に「おはようございます」の挨拶際にヒトの尻を叩いて愛想にする女子がいても、それで気がある、気がないとの心の揺らめきも皆無とくる。職員室では女教師が多くとも、大抵が自分より年上の先輩ならいように使われて、雑務を押し付けられ、小言は言われ、愚痴まで聞かされ、仕事のことならともかく女特有の話、悩みはどれも男にはわかり辛く、親身になることもなくなつて愛想笑いを浮かべて聞き流す術を覚えてしまう始末。興味もないと言うのに、女教師たちの思想趣味、私情に、人によれば性癖まで耳にしてしまうと、裸を見ずとも裸を知つたような気になつて、彼女ら貴女貴婦人方と一緒に風呂に入つたとて、おそらくそそられるものもないと思えば、机を並べているから手が触れ合うことがあつても、これも無味無感動に惚れたはれたに繋がらない。果ては上司である教頭も女性で指示と指示との間に叱咤もあれば嫌味を口にされることも多々あつて、上っ面では愚直従順を演じていても、内側では舌打ちしては呆れ面の嘆息三昧、この教頭も齢五十を超えていれば勿論これに恋する理屈もなく、男の自尊ばかりが損なわれて、どの女教師もいずれこれかと希望すら損なわれる。極め

つけは生徒たちの保護者、特に母親たちの身勝手な要求、文句が悩みもので、どこではびこったか世の母親方の利己主義は牙をむき出す猛獣にすら見える。学校の公共性を憚らずに社会通念に欠けたことを口にするのは得意だが、一度自分を捉まえて「女子高に何故男の教師がいるのか？」と聞いたことがあるように、学校の社会通念を逆に問うこともまた得意である。理不尽を数えればキリがないが、それら理不尽はどこから来るのかと考えると、本人がただ浅はかなのか、傲慢なだけか、世の女性全てが、いや今の世の男女同権を獲得した女性が古代より虐げられた性別「女」すべての憂さを晴らすことが男女平等と勘違いしていると思えて、生徒たちもいずれ歳を重ね人の親となる頃にはこうなるのかとの邪推に到ると、ますますもってこの園に嬉し恥ずかしくときめくものがない。

「そう、ときめくものがないんだよ」

久方ぶりに学生時代のサークル仲間男女十数人と酒の席を設けてもらったが、同期の坂本という男と端の方で二人喋りながら飲んでいると、自然と仕事の愚痴ばかりで、しかし、

「仕事場できめかないというのが仕事の悩みというのは、ある意味羨ましい悩みだな」

と、ひどく的確な指摘を返されて、加えて、

「でも、男としては、ある意味、惨めな悩みだな」

と、同情されるが、同情されるもまた惨め。というも、自分のときめきは何も女の園こと仕事場にのみ発揮されない話で済まされず、良くも悪くも女の裏顔を見知りすぎて最近では職場の外に出て、通りすがりの女性をもその素顔を知っているかの如く気がして、ど

れもこれにも、まず先と「園と同じ」のレッテルを貼ってしまう癖がついている。そんなものだから、園に限らず、どの女性を見ても、テレビで綺麗な女優や芸能人を見ても、やはりときめくものがない。

「そのままゲイにならなければいいけど…」

男色の趣味はないが、こうも女にときめかずにいると、それを否定しながら否定しきれず。とはいえ男にときめくものも一切ない。ならば「恋の喪失」と、坂本は人の惨めを哲学に晒して妙句を生むが、それも自分の悩みの解決には至らず。

現在自分には彼女はなし。先の彼女に別れてくれと言われて早一年、「恋の喪失」の始まりがその日と言われても駁するところもない。なくとも鷄呑みもできず、当時受けた傷心もそう引きずらずに女子高への赴任に臨んで、女子だらけと浮かれた気持ちもあつたなら、恋は恋と恋を望んでいたに違いない。しかし坂本、それが間違いの根本と、

「お前はまだ傷心を引きずっている」

と知ったようなことを口にする。

「いや、違う、正確には前の彼女のことをいまだ忘れられないでいる」

人の心の部屋、それも主不在の部屋に土足で入って、主も知らぬことをさも真実とばかりに持ち出し示す。それを坂本の妄言と思えば馬鹿な話、

「何を根拠に…」

と、軽くあしらって済ませるものの、そう言った途中の口をきつく嚙んで、はて我に問うて先の彼女への未練を確かめると、是にしても非にしてもまず即答がない。熟慮を要して先の彼女の残影を記憶の中で追いかけると、追いながらも追いつかず、追いつかないとますます追いかけて、されど追いつかず。思念が只そのみに集中し、額の中枢がそのみに力瘤を作りながらも追いつかねば、仕舞いに思念に我が精神が耐えられなくなって、ハッと現に戻る。眼前には冷笑した坂本の顔がある。呆けた眼ではそれを癩とも見えない。見えない代わりに俄然悲しくなる。

「あいつのことを、まだ好きでいるのか… 俺は？」

この自問が記憶の扉を叩いて、突き合い始めて一年の内に作った思い出は数知れずといよいよ甦る。愛深まって結婚の一字も胸に浮かんだ矢先に切り出された別れ話、理由を問うても自分の仕事人間の気質を嫌ったことだったが、それもきつと方便と見え透いて、おそらく別に好きな男が出来たというのが真意と見受けられた。いわゆるフラれた男の自分は、世の男女の恋の話のよくある結末とあたかも他人の目のように我の失恋を見つめていたが… それが間違い。

先の失恋に決着をつけられずに次の恋愛に急いたところで、隠した傷心は厄となって幸を寄せ付けず。また百の女の園でも払われず。立ち向かうにまず必要は、

「そうだな、俺はやっぱり、それでもあいつのことが好きだったんだ」

<  
J  
>

(後書き)

ここにあるいわゆる「女の園」のようなところに放り込まれて、自分が気付かされたことがこの手の類でした。自分はたまたまこうでしたが、人によって「女の園」に放り込まれて感ずるところ、気づかされるところは違うと思います。別の人が描いた「女の園」の話があれば読んで見たいとも思っています。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3281z/>

---

女の園は

2011年12月11日11時45分発行